



「全身麻酔器」を備えた診療室

全身管理下での歯科治療が 必要な患者も受け入れながら 地域の1.5次医療機関としての 役目を果たす

茨城県日立市の「征矢歯科医院」は長年、予防歯科に力を入れてきた。3年前から無痛治療を導入し、1.5次医療機関としての役割も担っている。予防と全身管理型の歯科医院として、その歩みと今後について伺ってみた。

征矢歯科医院 副院長 征矢 学 先生
院長 征矢 巨 先生



征矢 学 副院長

征矢 巨 院長

父や恩師、先輩たちから 受け継いだ地域医療への思い

「征矢歯科医院」が開業したのは1985年。インタビューをお願いした征矢学副院長の父、征矢巨院長が「地域に寄り添う歯科医院を」との思いを胸に開院した。

巨院長が重視したのは、歯周病治療と予防だ。当時は、虫歯を削って詰める、かぶせるの治療が主流の時代。しかし、巨院長は「口の健康を長期的に維持する」ことにこだわり、患者の口腔衛生に対する意識を変えていった。

そんな父の姿を見て育った学副院長が歯科医師を目指したのは、自然な流れだった。大学時代に目指していたのは、矯正歯科医だ。子どもの頃に受けた矯正治療で苦労した思い出があったからだ。

ところが、研修医時代、勤務先の歯科医院で出会った歯科麻酔科医が、学副院長の将来を変えることになった。大学病院以外でも歯科麻酔科医が活躍する場があること、一般の臨床現場で全身管理が必要とされる時代になっていることに気づかされたのだ。

東京歯科大学大学院で歯科麻酔学講座を専攻した

学副院長は、師事した一戸達也教授の言葉にも感銘を受けることになった。

「麻酔では患者さんを治すことはできない。歯科治療の技術も身につけ、必要とされる歯科麻酔科医にならなさいと一戸教授から教えていただいたのです」

その言葉を励みに歯科麻酔と治療技術の研鑽に努めた学副院長は、大学院修了後、週1~2回の征矢歯科医院の勤務と並行し、フリーランスの歯科麻酔科医として全国から麻酔業務を依頼されることになった。そこで見たのは、大学病院クラスの設備が整っていない地域では、歯科麻酔科医による全身管理下での治療を受けることが難しく、患者が遠方まで行かなければならない現実だった。そして、同様の現象は、征矢歯科医院がある日立市でも起きていた。

学副院長は、「時間や費用の制約から通院が難しく、歯科治療を諦めざるを得ない状況をなんとか改善したい」という一心から、巨院長と相談し、征矢歯科医院の診療内容に無痛治療を加えた。

そして、3年前から静脈内鎮静法による無痛治療を開始。昨年から、日帰りで可能な全身麻酔も導入した。これまで約150名の患者が、全身管理下での歯科治療を



全身麻酔を必要とする治療では、麻酔管理を学副院長が担当し、口腔内の治療は巨院長が担当している